## 【解説】魏志倭人伝

### 邪馬台国論争

邪馬台国論争は、日本が国家として在ったという黎明期の状勢から説き起こさねば解決しない。黎明期における「国家」の定義は、王と民と兵によって構成される社会である。身分の分化が生まれていない昔から、やがて民の中から王が出る。その王は民のなかから兵を組織して、王権を確立してゆくのが常である。

さて、本稿では年代の特定を敢えて行わないので、歴史を語ることにはならないが、その意図は邪馬台国論争という歴史問題を解決するには、時の流れと事象の大まかな関係を先に理解しないと切り口が解らず、結論が出ないからである。

日本の国史（古事記、日本書紀など）に、邪馬台国は登場しないので、その存在を否定することは容易い。しかし、一方では魏志倭人伝と呼ばれる魏の国史に邪馬台国は書かれているので、魏書を偽書とするか、事実を伝えている歴史書とするか、何れかである。魏志倭人伝には、事実でないものが含まれているかも知れないが、ある程度の根拠に基づいて書かれているとするのが筆者の考えである。蔑称記述の歴史書だが、倭人のために書かれたものではないので、先ずは素直に読んでみた。

諸兄にとっての関心は、邪馬台国がどこにあって、卑弥呼は居たのか、そして、後に大和朝廷という天皇を頂点とする日本国と、どういう関係にあったのかであろう。邪馬台国論争は、これらの疑問と答えを提供する各種の証拠の、正否あるいは比定（どこにあるのか、何に相当するのかという問題）である。

### 邪馬台国予想

筆者は、魏志倭人伝の原文およびその訓読も示した。この原文の漢文の「区切り」について、若干の新案で臨んだところ、思わぬ発見があった。邪馬台国諸説の著作は千冊を超えると云う。然るに、何を以て邪馬台国論争があるのかは、諸兄は既に知るところであるとして話しを進める。先ず、先に筆者の結論を述べよう。

邪馬台国は「吉野ヶ里」である。卑弥呼も後継者の壹與も居た。その証拠は何かが、歴史問題であり、考古学の問題でもあるので、研究者の論から導かれる結果を待たねばならない。筆者は物的証拠を提示できる立場にないので、予想を示している訳である。

### 地理的条件

先ず、前提を述べる。魏志倭人伝が述べている倭国が北部九州に存在する為には、食料問題に着目すれば良い。国の民が生活するには、食料が要る。筆者は邪馬台国が北部九州に在った根拠を詳述しない。畿内説を含め多くの説があることは筆者も承知しているが、九州説を唱える研究者の論を是とした。

魏に朝貢する大規模な国を構成できる場所は、稲作によって食料を得なければならないので、候補地は二つしかない。筑紫平野と直方平野である。筑紫平野には筑後川が、直方平野には遠賀川が流れている。河川はこれだけではなく、支流もある。それらを生成させる山脈も必要である。山裾は水源を得る所であるばかりか、燃料を得る場所でもある。炊事および兵器製造の為のエネルギーを確保できる所に国は形成されるからである。

筆者は、古い時代は海が現在の陸端より更に山側に迫っていたとする「海進」も検討する為に、国土地理院の等高線地図でシュミレーションも実施した。その結果、地理的条件でこの二候補地にほぼ決まりである。

### 地政学的条件

次は地政学の問題である。九州北部は玄界灘に面しており、支那、朝鮮からの脅威に晒される。遠賀川下流に上陸されると直ぐに占拠される。博多湾に上陸されると那珂川沿いは占領されるが、太宰府で防御できる。その南は安全であり鳥栖、神崎と伝ってゆけば、吉野ヶ里はもっとも安全な場所である。時代を下って、元寇の戦跡をみても明かである。

その先はどうか。吉野ヶ里から南下した筑後川の東南岸は旧山門郡として邪馬台国の領土ではあったろうが、敵国の**句奴国**に接するので危険である。従って、邪馬台国は都を吉野ヶ里に置いたのである。

### 呼称の問題

土地の呼称は千年から二千年は保たれる。人名や社会制度の呼称も、言語上の発音や伝承の中に記憶が残るのである。魏志倭人伝では当時の倭国の人間が発声している音を、魏の漢字に音写しているので、音をたぐれば古書の表わす対象が分ってくる。

土地の呼称は各地に同じ呼称を見つけるので、往時と今日の対応を判断するのに厄介であるが、その理由は明快である。それは、特に日本では自然環境が各地で劇的には変らない。そこに住む人々が交流すれば、その社会性に対応して、地名が与えられる。人名も含意のある人名となる。最も端的な例は神社の主祭神が、各所の神社間で共通していることであろう。

### 重要呼称

さて、二三の重要呼称についての結論を述べよう。

倭国は自称である。朝貢して「お前は、国を何というのか」と問われれば「我が国」と通詞に言ったに違いない。それが国の自称として使われて、**倭国**となる。住む人々は**倭人**である。

邪馬台国はヤマト国と発音されていた。山の戸に位置したので、その通称が国の名称となった。戸とは、入口の意味である。海や川の入口を瀬戸というのと同じである。実際、吉野ヶ里は背振山脈という山に分け入る「戸」の場所にあり、北は山に面し、南には豊かな筑紫平野が広がっていた。ヤマタイ国は**邪馬台国**である。

女王卑弥呼は太陽を祀る巫女である。それを「**日巫女**」と人々は呼称していた。朝見した遣使は自国の女王名をヒミコと述べたのである。日本では貴人を普段は実名では呼ばない。従って、**卑弥呼**はその発音を蔑称漢字に当てたものである。実名の考察は、別稿に譲ろう。後述するが、卑弥呼の死は事件であったので、その後の経緯を表わすために、後継者の**壹與**は実名で呼ばれている。

これ以降、**倭国**、**邪馬台国**、**卑弥呼**、**壹與**をフリガナの通りに言うことにする。

### 連合国と専制国

さて、日高見国とは、縄文時代から日本に定着していた人々が段々と形成してきた国である。都は茨城県の**鹿島**にあった。

日本列島には、関東には日高見国、日本海に面する地域には出雲国、そして九州の邪馬台国があった。古事記、日本書記には邪馬台国が書かれていない訳は、壹與の後に弱体化した邪馬台国が日高見国に征服され、滅亡したからである。

倭国は邪馬台国を盟主とする連合国家で、「倭国大乱」を治めて、卑弥呼が女王に君臨した。しかし、女王を共立しても連合国家だったので、代が変れば分裂する。その点、専制国家であった日高見国が強かったのである。但し、日高見国も内部では権力闘争が何度も繰り返されている。その一つの舞台が、**香春**と**嘉麻**である。

### 邪馬台国の戦略路

吉野ヶ里は現在の地域名称である。魏は、洛陽に都を置いたが、邪馬台国の都の呼称は分からないので、「吉野ヶ里」を都の名称と仮称する。ここでは、他の邪馬台国の歴史解説書とは少し視点を変えて、陸路、海路の戦略路を考えてみる。

吉野ヶ里からの戦略道路は何本かある。道路は敵の動きを知らせる役目の道と、行軍の道である。前者を伝令路、後者を兵站路と仮称すれば、吉野ヶ里の北端の「戸」から背振山脈を越える道は**奴国**（博多）に出る。この道は、吉野ヶ里から鳥栖を回り太宰府を通る、那珂川沿いの兵站路に比べると最短の伝令路である。

次は、邪馬台国の西に在る**姐奴國**（佐賀）から、現在の地名で大和町から小城市、多久市を抜けて**伊都國**（唐津）に出る伝令路である。そしてもう一本は、小城市から分岐して、武雄市、有田町を経由して**末盧國**（伊万里）に出る伝令路である。

### 日高見国の戦略路

吉野ヶ里の東はどうか。筑後川の東岸は久留米市、日田市、玖珠町、由布市を経て大分に達する。この道は日高見国の侵略に備えた邪馬台国の伝令路であり、日高見国の伝令路でもある。兵站には険しく、長い。

日高見国の兵站路は海路であり、宇佐市から下関を経由して遠賀川河口に達する。遠賀川を、直方を経由して南下遡上して**香春**に至る。現在の田川市の東部で、やはり山の戸にある。

もう一本の兵站路は、直方から分岐して、飯塚を経て**嘉麻**市に至る。日高見国の兵站海路の距離は長いが、海路はスピードがあるので、短期間で行ける機動力があったと思う。

### 卑弥呼の死と墓

卑弥呼は「殺された」。魏志倭人伝の原文を読めば分かる。それに気付いたのが小説家の松本清張である。筆者もその一人であり、同じように洞察する人がいるものだと感じ入った。魏志倭人伝の最大のエピソードなので、後日に別稿を起こそう。

では、卑弥呼の墓はどこか。祀られた場所はないのか。

倭国は魏に朝貢する隷属国家であったので、日高見国（後の大和朝廷）の国史である古事記、日本書紀には記載されなかった。武力激突で征服したのであれば、被征服者の怨霊を鎮めるために、例えば卑弥呼は神社に祀られたであろう。邪馬台国の王達は、後の風土記に云うところの「土蜘蛛」の位置付けであったために抹殺されて、神社はない。「卑弥呼神社」が無い理由である。卑弥呼の墓は魏志倭人伝の通り、在った。無論、邪馬台国に葬られた。

### 日高見国の覇権

鹿島を都とする日高見国は日本各地に、王の一族を立てて派兵している。これが天孫降臨である。日高見国の征服者を「天津神」と云い、帰順した王族を「国津神」と云う。従って、時代ごとに、第一次天孫降臨、第二次天孫降臨等々となる。九州には後の神武天皇となる一族が鹿島から派遣された。場所は日向。

筆者は今の宮崎平野であると考えている。一ツ瀬川、大淀川を有する大きな平野に上陸し、定着した。天孫降臨は、この地の西に位置する鹿児島県の高千穂峰である。この辺の事情は田中英道先生の「日本古代史」（育鵬社）に詳しい。

### 日本書紀の矛盾

さて、神武天皇は東征を始めるのだが、畿内に王朝を開く途中で、**香春**と**嘉麻**に政権を樹立し、交互に内部で覇権を争いながら、邪馬台国の倭国も支配下に置いた。東征の完了は奈良であるが、九州と畿内の、いずれの即位も初代の天皇を神武とするところから、日本書記では論外の長寿の天皇を記述するなどの矛盾が生じている。この謎を解いたのが、市井の歴史家である福永晋三先生である。日本書紀では、二つの異なる時代の王朝を、万世一系に統一して記述したことによる矛盾である。「魏志倭人伝を解く（序章・邪馬台国 田川説の濫觴）」（同時代社）に詳しい。

### 歴史問題の解

筆者の邪馬台国にまつわる考察は既に述べた。

令和四年の秋から、吉野ヶ里では新たな考古学の発掘が始められている。吉野ヶ里公園内には日吉神社があった。この神社が移設されるのを機に、その場所が発掘されているのだ。そして、数日前に大きな墓を発見した。佐賀県知事が会見を開くという大発見の知らせである。

その棺は令和五年六月五日に開かれる。埋葬された遺骸や副葬品を見れば、それが卑弥呼の墓か否かは分かる。これで２００年来の邪馬台国論争に終止符が打たれるかも知れない。

筆者の解の裏付けとなる物的証拠が出る日を前に、邪馬台国予想を提示して、この稿を了とする。

令和五年六月三日

大中臣正比呂　記